

メを使い、6万ルクスの光から光量を減らし、暗黒まで順に測定。使用したプロダクトメーターは、榎本先生の友人の考案である。高校現場での購入があまり進まないため、実習の後、意見交換。話は高校教育のあり方、大学入試のあり方まで進み、深夜まで話がはずんだ。

○プランクトンの採集と観察

船で明石海峡へ出てプランクトンの採集。実習も3日目になると疲れも出て、船酔いする人も出た。渦鞭毛藻、有鐘纖毛虫など色々なプランクトンが観察できた。

実習を指導していただいた榎本先生、西田先生、小林先生及びお世話になった実験所の技官の方々にこの紙面をお借りしてお礼を申し上げます。(西井)

参加者

検見川 功(川西北陵高) 中田 浩嗣(淡路育)
奈島 弘明(青雲高) 藤原 正人(北条高)
竹内千登勢(福岡高) 向 恵子(洲本実業高)
南雲 努(県立西宮高) 後藤 統一(西宮甲山高)
西井 隆(香寺高)

講 師

榎本 幸人(神戸大学理学部)
西田 宏記(神戸大学教養部)
小林 辰至(神戸市立鷹取中学校)

事務局:阪口 正樹(市立西宮東高校)

平成3年度 夏季研修会報告

小城原生林(村岡町)観察会報告(8月1,2日)

8月1日は、平畑先生のアサギマダラの卵の孵化および孵化後の生態観察スライドの説明を興味深く聞き、続いて筆者の持参したスライドの中から100コマほどを選び、但馬の山岳地形の特徴と代表的な植物を観ていた。時間つぶし程度に考えていたが、予想外の反響に、感謝した。特に、今春新聞紙上に出た村岡町の「銚子ヶ谷湿原」のカキツバタ群生、ショウキラン、氷ノ山のリュウキンカ群生、タマガワホトトギス、さらに但馬各地の溪谷案内など「但馬の自然」植物編を急ぎあして観ていただいた。翌日、「あのスライドのランはヤツシロランだとおもいますよ」と丁寧に教えていただけたのは筆者にとって大変うれしいことであった。

8月2日、8時に宿舎を出発し、射添溪谷沿いの急な坂道を登ると小さなループ橋にかかった。ここが和佐父集落である。雪の但馬で、この人達の生活は?……と感心する間もなく車は坂道をどんどん登り、標高600m近くの峠に出た。ここでひと休憩し、これから行く小城集落と小城原生林の位置にういて簡単に説明した。小さな

谷間の道を10分余り進むと3戸の小さな集落「大切」に出た。ここから再び急坂を小城へと向かった。小城で車と別れ、各自荷物を背負って原生林へ向かった。神社境内にはトチ、アサダ、ケヤキ、イタヤカエデなどの大木が鬱蒼と茂っている。ゆっくり観察したいが後の予定があるので足を前に運ぶこととした。

比較的若い2次林の中を汗を拭きながら登る。山道沿いにヤネフキザサ、クロバナヒキオコシ、ノブキ、イタドリ、キンミズヒキが、頭上にはキブシの実やハクウンボクの白っぽい実がいっぱい。道沿いが湿っぽくなるにつれてクサアジサイ、ツリフネソウが。乾いたところにトキワイカリソウ、キクバヤマボクチが。どんどん登るにつれて、斜面のあちこちにアツミカンアオイ、オオイワカガミ、ムラサキマユミ、タジマタムラソウが出てきた。標高700m付近でヤマボウシ、ミヤマガマズミ、ナナカマド、ユキグニミツバツツジ、ヒメアオキが、林床にはゼンマイ、ユキザサ、ミゾソバ、ササノハスガ、イチヤクソウ、アキノキリンソウなどが見られる。高度を上げて小峠につく。目前に三川山のマイクロウェーブが見える。三川山の西斜面に数ヶ所原生林らしき森が見える。水上原生林である。他はほとんどスギ植林地である。その多くは人手不足のため手が入っていない。今後も放置されるのではないかと思うと林野行政のあり方に疑問を感じずにはいられない。峠で汗を拭いて、スギ植林地沿いに最後の登りにとりかかる。周囲にはニワトコ、シシウド、ヒキオコシ、サジガクビソウなどが。左側の自然林はイヌシデ、ヤマナラシ、タムシバが。コシアブラの木にマツブサが巻きつき、実をいっぱいぶら下げている。ミズナラの古木にはヤドリギが半寄生している。ナツツバキの白い花やコムラサキの紅紫色の花が目にはいる。ミヤマナルコユリ、マルバマンサク、アズキナシも収集しようと追い掛けているうちに山頂に到着した。山頂から1m程度下がった山頂の一角が不思議なことに湿地となっている。どこに水脈があるのだろうか。誰も答える人はいない。湿地の広さは17m×10mだ。最も深い所は50~60cmある。湿地内の植物を見るとカサスゲ(?), アブラガヤ、ミズオトギリ、サンカクイ、ヒメシダである。数百年の歴史を持つこの原生林は小城集落を積雪による雪崩から守り続けてきた。人と森の共存する姿を感慨深く思うとき、自然に対する畏敬の念を感じずにはいられなかった。安易に便利さを求める現在の私達の生き方を問いたですべき機会であったように思えた。

時間の関係で原生林下を観察しながら下ることとした。直径1m余りあるブナの大木の林床にはクサアジサイ、ヤマソテツ、オオナルコユリ、モミジガザ、ホウチャクソウ、ハエドクソウ、ミヤマカタバミ、コタニワタリ、ヤマシャクヤク、サンカヨウ、カニコウモリ、エンレイソウなどが

見られ、低木としてアワブキ、ウリノキ、ハイヌガヤ、アサクラザンショウが散見された。登りに1時間半余りかかったところを30分ほどで下ってきた。山道を隔てた谷平地はトチノキやイタヤカエデ、ハリギリの大木で鬱蒼としていた。ここにはシュスラン、ミヤマタニタデ、チゴユリ、カンアオイ、オニノヤガラなどが見られた。昼食場所に小城集落の民家の庭を借り、真夏の昼のひとときを涼しく過ごした。民家の庭にはヒメコマツの大木が聳え、キャラボクの隣にオニノヤガラがニョキニョキとのびていた。老婆が冷えたお茶で精一杯のもてなしをしてくれた。なんとどのかな風景であろう。俗界離れ、心の静養をした一日であったのは筆者だけであろうか。帰路、大切集落に立ち寄り、アカシデ、イヌシデ、クマシデの実を比較したり、谷間でイワタバコやサンインシロガネソウ、ミョウガの採集をし、朝の出発地点である射添へと急ぎ、ここで2日間の目的を無事終了した。(前田)



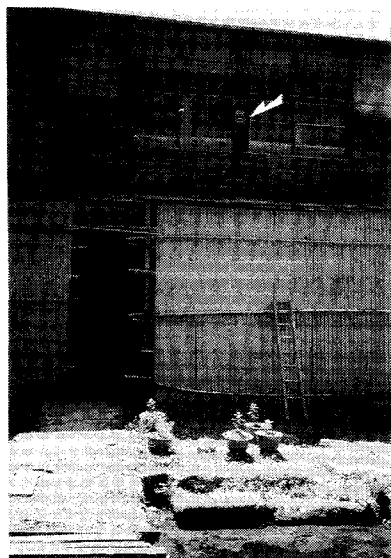
小城峠

参加者

朝倉 襄	岩谷 成彦
岡山 達也(但馬農高)	金山 韶郎(豊岡南高)
甘中 照夫(福岡高)	岸本 正幸
沢口 宏(浜坂高)	菅村 貞昌(豊岡聾学校)
高橋 匡	田中美喜朗(出石高)
田村 統(山崎高)	富川 哲夫(夙川学院)
中西 敏昭(兵庫高)	西村 重喜(豊岡高)
平畑 政幸(姫路学院)	前田 常雄(村岡高)
向山 俊作	守田 治夫(姫路東高)
盛谷 浩	矢内 正弘
山崎 喜彦(和田山中)	山田 隆(長田高)
山田政五郎(温泉高)	由良 甫(豊岡高)



小城原生林



小城の民家の郵便ポストは？

新刊紹介

「箸の文化史」 一色 八郎 B5判 237頁
3914円 お茶の水書房

筆者は、幼児教育の専門家である。永年にわたり幼児の手と脳の発達の間連について研究し、脳の発達を促すには手の運動が最も効果的で、身近な箸の使用を提唱している。さらに筆者は、これらの研究の発展にともない、箸にまつわる文化史的な視点から日本人の思想観にまで触れている。本書の内容は箸と日本人の生活、風習、思想などをたどり、箸の種類、作法、箸の使い方から手と脳との関係などに関するすべてを網羅しており、図版を多く用いて分かりやすく解説している。幼児教育に関係している方はもとより、教育に関係している方々にも是非お勧めできる好著である。